

勿凝学問 134

社会保険方式論者ねえ、まあ、悪くはないけど違和感はあるね
プロと素人の見解の相違としての基礎年金財源方式と混合診療問題

2008年1月31日
慶應義塾大学 商学部
教授 権丈善一

先日、官邸担当の記者という人から研究室に電話があった。
「社会保障国民会議のメンバーに権丈先生のお名前がありました。
先生は、租税方式をどう思われますか？」
「書いているんで、ホームページでも見ておいてくださいね(´。´)ボソ…」
と返事をする。

その時の記者さんかどうかは定かではないが、昨日1月30日の朝刊に、ボクを「社会保険方式論者」と規定した記事が載っていたのを、知人の退職記念講義が待つアムステルダムへ向かう機中で拝読。違和感がなきにしもあらずなんだけど、そのあたりの違和感は、わたくしのゼミの学生も感じたらしく、彼らは、ゼミの掲示板の中に、次のような書き込みをしてきた。

- > 記事では先生が「社会保険方式論者」と紹介してあって、何か妙な感じをうけました。
- > レッテルといふかなんといふか・・・新聞ってそういうもんなのかもしれないね。

他にも、

- > 権丈先生がこういう立場で、民主党はこういう立場で・・・っていうのに終始して
- > なにか物足りなく感じてしまいました

うん、まあ、そうだろう。

ボクは、知り合いの記者に、どうも今年の11月9日に、次のようなメールを送っているよ
うだね。

- > 追伸
- > 年金については、民主党案、租税方式を否定するための企画には協力いたしますが、
- > 両論併記の企画には関心がありません。

だって、そうだろう。年金研究のプロで、誰一人も民主党案とか租税方式を支持してい

る者はいないよ。かつて民主党案や租税方式を支持していた人が、考えを変えた人はいるけど、その逆はいない。これは、ちょうど医療問題とも考え合わせれば、次のような関係と理解することができると思う。医療研究の専門家でも、誰一人、混合診療の全面解禁を支持している者はいない。そしてこれは研究者界の恥ずべき特徴なんだけど、プロは素人の書くものを読んでいるけど、素人はプロの書いたものは無視をして自分で言いたいことを言うだけの傾向がある。それに、研究界への新規参加者は、だいたい例外なく、基礎年金租税方式や混合診療全面解禁の支持者として発言しはじめるから、これらの議論は、研究者の間ではとっくの昔に決着がついているのに、未だに世の中では古くも新鮮かつホットな問題として議論が続けられているという特徴を持つことにもなる。やれやれ。

表 1 プロと素人の見解の相違としての基礎年金財源方式と混合診療問題

	年金問題	医療問題
	基礎年金租税方式化	混合診療全面解禁
研究のプロ	冗談だよ	冗談だよ
素人	大賛成	大賛成

えっ、基礎年金の租税方式化とか混合診療全面解禁とかを支持されている有名な方とかいらっしやるじゃないですか？と思われるかもしれないけど、有名さや露出度と研究のプロ度とは、パラレルに動いていないところが世の中のおもしろいところなんだよね（笑）。そしてこの国では、知名度が地位に決定的な影響を与える・・・まあ、どの国もそうなのかな。あつ、それと、素人と同じポジションをとっているのが、いつもながらの日経新聞ね。あそこはとにかく、生活者を犠牲にして経済界に利する政策には、もれなく支持を表明して大々的にキャンペーンを張るようだから、分かりやすくて、なんかいいよね。ああいう分かりやすさは、思考を随分と節約できるから、ボクは好きだなあ。。日経新聞が、いくら未納未加入ゆえの無年金低年金者にも年金を給付するために云々・・・とカモフラージュしてみても誰も信じないだろう。だって彼らの年金改革案だと、現在、＜低所得者でありながら無年金低年金の人たち＞に年金を給付するどころか、そんなことは一切なくて、新たに消費税の負担を課すだけなんだからねえ。いま、＜低所得でありながら無年金低年金者の人たち＞と書いたけど、彼ら日経新聞の年金改革案では、保険料の追納を認めているようだから、追納することができるほどにお金に余裕のある人は、公的年金を受給できるということになっている。救うべき人を救わず救う必要のない人に国庫負担が投入された年金をしっかりと給付する——おいおい、それはないだろう、などとは彼らは思わない。ここまではっきりしていると、なんだか素敵ですね（笑）。

ところで、昨日飛行機の中で読んだ新聞の記事には、ボクの考えと連合の基礎年金租税方式案が併記されていたみたいだけど、連合の基礎年金租税方式案が、日本の年金制度へ

の誤解を発端として発案されたということはプロの世界では普通に知られている話。すなわち、労働貴族からなる連合の人たちは、未納未加入者が増えると、その保険料未収納分を自分たちが所属する被用者年金のみに負担させられていると勘違いした。そこで、租税方式にすれば自分たちの利益を守ることができるだろうと思って、租税方式を考え出した——というお話。組合健保が、政管や国保への持ち出しとなる財政調整をとにかく嫌い、なんでもかんでも租税、租税というのと同じ行動原理に基づいた反応でしょうね。でも、組合健保が言うのは事実として観察される財政調整に基づいた発言だけど、基礎年金に関して連合は2重の意味で間違えているんです・・・やれやれ。

これまで何度も書いてきたように、未納未加入者が増えても、厚生年金の保険料率は、今予定されているよりも高くないんです。そしてそれでも、被用者根きんきんの給付水準はほとんど下がらないんです。

そのあたりの、公的年金が持つ所得再分配構造を、連合もようやく理解してきたようなんだけど、昨年11月に開催された前回の年金部会で連合代表の小島茂生活福祉局長が「今さら変えることはできませんし・・・」と話されているように、彼らには彼らなりのお家の事情もある。それに最近、租税方式を言い続けていてもどうせ実現はしないのだから、そうならば、彼ら労働貴族が本当のところは願っている第3号被保険者制度の存続も見込めることができ、第3号被保険者制度の廃止を訴える働く女性の要望をそらすことができる——そんなことを考えているんじゃないかという仮説が、なかなか棄却できないでいる。でもね、なんとかして連合には、われわれと共同戦線を組んでももらいたいと思っているんだよね。なんとかして、いつの日か。今のままでは、会長はかわいそうだよ。会長は、情け深く、非常にいいことをいつもおっしゃられているのに。

だからね、話はいきなり大きく飛ぶけど、社会保障国民会議がどのような役割をはたすかどうかということは、そこでの議論を報道するメディアさん達が、プロの域に達するかどうか強く依存するわけです。研究のプロはだいたい善し悪しの判断基準を、この国に住む生活者たちの幸福に資するのかどうかにおいているわけで、プロの判断にしたがった制度を構築すれば、おおよそこの国の生活者は素人の意見に従うよりも幸せになる・・・とプロはみんな自負している。けれども、不完全な情報しか持たない有権者により運営される民主主義という制度の下では、常にプロが勝つとは限らないし、政治にはヒステリーというものがあって、みんな不幸せな世界に自信と確信をもって突き進むこともある。昭和の初期など、みんな自信をもって素人の考えに乗って誤ったんじゃないのかな。と同時に、ボクが「医療政策は選挙で変える——再分配政策の政治経済学Ⅳ」のあとがき（本稿3頁参照）に書いているように、情報技術の発達のおかげ（せい？）だと思うんだけど、今日、民主主義的意思決定における素人さんのウェイトがとみに高まってきているのも観察される厳然たる事実。

ということで、今後、どうなるんでしょうね、世の中。

ただ少なくとも言えることは、社会保障国民会議の発足で、官邸担当の人たちが、Who's 権丈?と訝しく思いながら、社会保障を論じなければならなくなってしまったとは思いますが、あの会議の命運は、あなたがた官邸担当のメディア関係の方々が、机に向かって社会保障制度を勉強する量に強く依存しているということは確かでしょうね。これまでのように、声の大きい人へのインタビューの量に依存して世論が形成されるのでは、少し寂しすぎますね。

先日の第 1 回社会保障国民会議の後、官邸を出ようとしたときに数人の記者さんたちにインタビューされた。その時、

「野党が参加しない社会保障国民会議をどう思われますか？」

「彼らに参加するインセンティブなんかあるわけないだろう。」

それに、2000 年代に入って社会保障に関しては有識者会議¹、在り方懇²と、こういう会議が設けられるのは 3 度目かな。2 度あることは 3 度あるのか、それとも 3 度目の正直か。でもまあ、こういう会議には、あまり期待しないことだね」

と応えたけど、有権者の不完全情報下で運営されざるを得ない民主主義の下でこういう機関が必要となることは分からないではない。だけど、それが機能するかどうかは、かなりの部分、メディアの方々をはじめとした情報を司る職業人の学習量に依存するというのはいえるだろうね。机に向かっての学習量に依存するなど記者さんの的には、エキサイティングな話ではないだろうけど。

あつ、それと、民主党案は、基礎年金の受給要件に 2 階部分への保険料支払いの有無が規定されているみたいだから、あれは、年金用語的には「保険方式」です。民主党案は、現行の基礎年金への財源を国庫負担 100%にした保険方式ですので、彼らの方式の下でも未納未加入問題は発生します・・・ややこしくってすみません<(_)>^{ペコッ} 大切なことってのは、複雑なんですよ、まったく世の中は困ったものです。。

■ 大切なことは複雑・・・に関する文章

勿凝学問 43 [首相の失言は優しく忘れてあげましょうよ、それが大人というものでしょう](#)
[——厚生・共済年金一元化と追加費用](#)

■ 「医療政策は選挙で変える——再分配政策の政治経済学Ⅳ」のあとがき

1 社会保障構造の在り方について考える有識者会議報告書「21 世紀に向けての社会保障」(2000 年 10 月)。

2 社会保障の在り方に関する懇談会報告書「今後の社会保障の在り方について」(2006 年 5 月)。

第2版序文「勿凝学問 99」のつづき——北海道大学公共政策大学院(公開研究会)補講

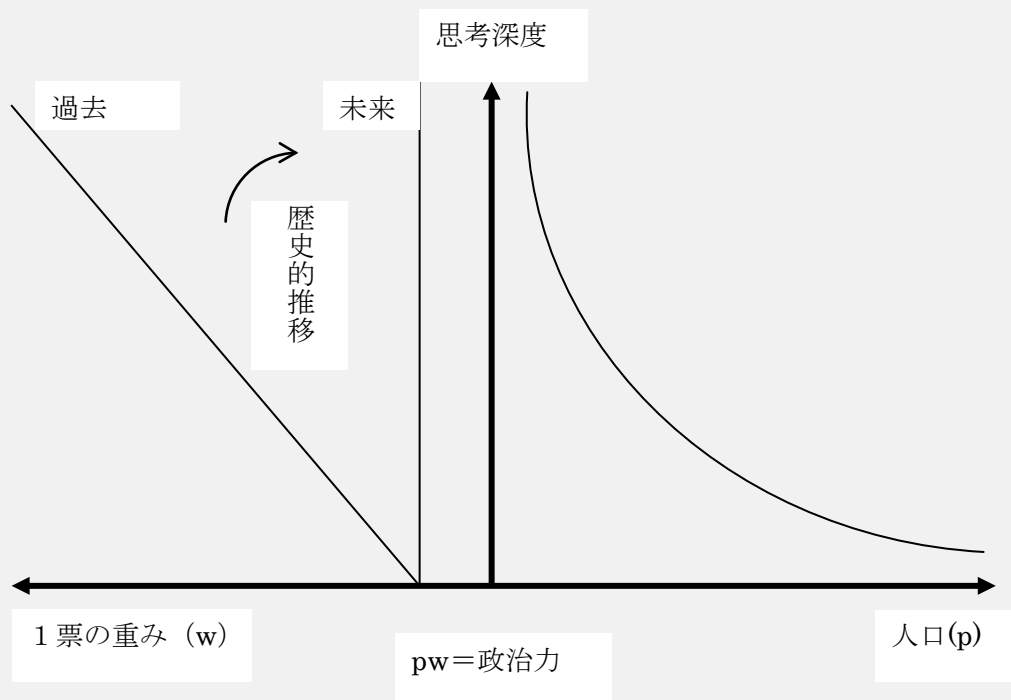
先週の金曜日 7月 20 日夜、懇親会という大儀名分の下、札幌の居酒屋で飲んでいた。その場の出席者のほとんどは、ここ数ヶ月の年金報道がこの国の進路を誤らせることになるだろうと考えることができる程のひとたちであった。彼らは、北大大学院法学研究科・公共政策大学院の教員・学生であった。

2時45分から6時までの3時間15分、途中8分間ほどの休憩の他は、わたくしはひとりで延々としゃべっていた。終わった後、「他の先生たちは学生に質問したりして、学生の眠気を覚まさせようとされるのですが、先生は、そういうことをせずによくこれだけ学生の集中力を持続させることができますね。誰も寝ていませんでしたよ(笑)」と言われたので、「だって、誰が先生で誰が学生なのか見てもわからないんだから、質問するのはリスクで、質問したくてもできなかったんですよ」と答えたほどに、学生さんたちは年齢もバラエティで、後で知ったが経歴もバラエティであった。

そんな講義の中、最近わたくしは、次のようなことを考えているとあって、[勿凝学問 94](#)

そして最後に、次の図を説明して、今の政治、まあ、いかんともしがたいものがあるってところだね、と話しを結んで、2007年度健康マネジメント研究科の講義を終了。

図 1 思考深度と人口反比例の法則と1票の重みの歴史的推移



思考深度の高さと人口は反比例する。そして、過去においては、いろいろな仕組みや時代的思想のもと、思考深度の高い人の1票の重みは高く——すなわち彼らの考えが人々から敬われる度合いは高く——維持されていた。ところが、(かつて活版印刷の発明1450年頃から半世紀少しすぎた1517年にルター宗教改革などが起こったように) ここ100年の情報伝達技術の発達の影響が大きいと思うけど、1票の重みが思考深度と正相関する関係がくずれ、思考深度と関わりなく1票の重みが万人平等化する方向に動いてきた。よって、人口と1票の重みの積 pw で表される政治力は、しだいに思考深度の低い人たちに移行していく変化を、世界の歴史は示してきた。学者の矜持は、思考深度の高いところにみずからを留まらせようとする働きをしてきたのであるが、その学者の矜持さえも競争原理のあおりを受けて次第に失せていき、もてはやしてくれる人たちの数が勝負の世界に墮落してきた。

オルテガの『大衆の反逆』が出たのが1930年、ヒトラーがクーデターの失敗後に方針を転換しておよそ10年後、完全に民主主義体制にしたがいながらその体制の下で大統領と首相を統合した総統になるのは1934年。それから70年。日本は2007年参院選の公示日を今日迎えたわけだけど、選挙戦の様相をみていると——なんだか、頭が痛いね(笑)。

北大での講義は「日本の社会保障と医療——小さすぎる政府の医療保障」であり、その中で、どういう文脈の中であったかは忘れたけど図1を説明した。そのために、講義の感想として、学生さんから「私もここ北海道で、思考深度のある人間の一人になりたいと思います」と書かれたメールが送られてきたりすることになる。あの日は、エントロピーの公式 $S = k \log W$ を墓に刻んだ物理学者ボルツマンのように、 pw = 政治力と僕も刻みたいと冗談を言って遊んでいたのであるが、本日は、この前の講義の補講をひとつ。

図1の思考深度は、ある問題について思考訓練をしてきた期間 t で近似することができるであろう。つまり年金問題であるならば、これについて考えはじめた期間は、1年とか2年とか、そういう t で思考深度は代理できるであろう。

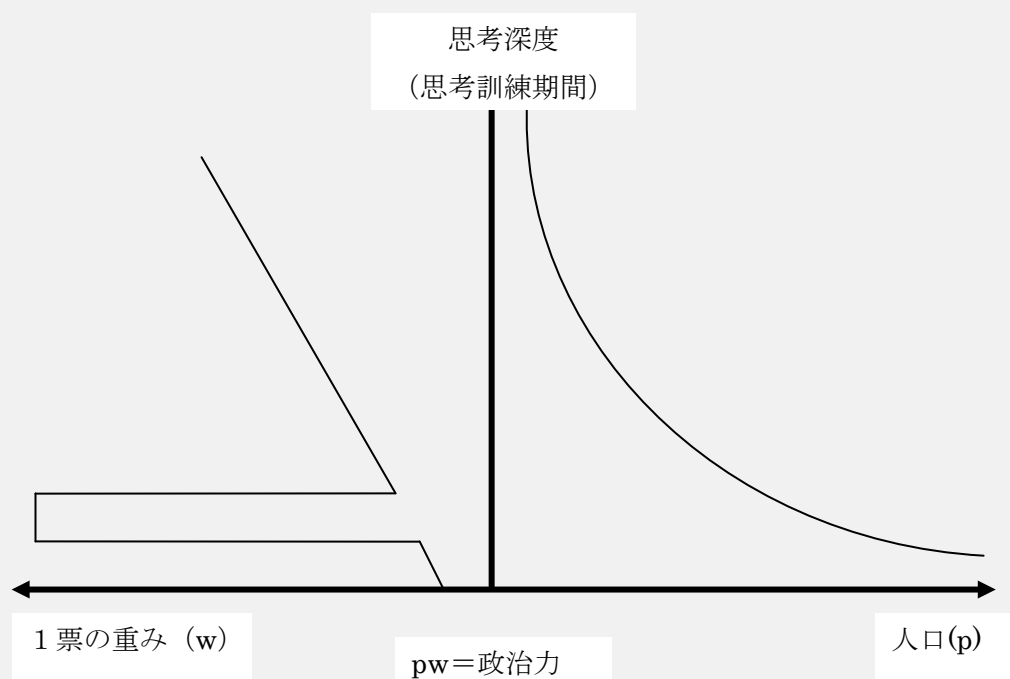
ところで、勿凝学問85を書いたとき、次のような連絡が入った。

- > 年金担当記者って、本当の意味ではあまりいないのではないですかね。
- > 単に、年金を担当する部署で1、2年間のお勤めをしている、という場合が多く、
- > 年金はネタのひとつに過ぎません。
- > 部署が変われば年金なんか忘れてしまう。大半はそんな感じだと思っています。

確かに、そう——おっしゃるとおりなんです。したがって、メディアと政治力の問題を

考える際には、図1を次のように考える必要が出てきたりします。

図2 思考訓練期間と政治力



あまり説明する必要はないと思いますが、たとえば年金について言えば、年金についての思考訓練期間の短い層の論が圧倒的政治力を持ってしまう。こういうことを言うと、分からないのは制度が複雑だからなのであって、したがって一元化が必要なのだ、保険方式をやめてしまえという話しに飛躍してしまったりするのであるが、勿凝学問 43 に書いているように・・・

本当に困ったことに、世の中、大切なことは複雑なんです。重要なことは簡単には理解できない。だから、みなさんに代わって考えるわれわれ——みなさんに代わって事を議する人たちを代議士と呼ぶように、みなさんに代わって考える人たちを代考士と呼べないものかと学生に提案したこともあるのですが、流行りそうにありませんね、この代考士——に、考える暇が与えられているはずなんですけど、最近、この代考士さんたちもなにかと忙しいようで、なかなか立ち止まって考えようとしません。だから世の中の論が、乱されるままに乱れてしまっているのではないかと。ゆえに世論はおおかたいつも間違ってしまうことになる。なんともそういう感想などを、近頃はいただいております。

・・・となる。

でもまあ、思考深度と思考訓練期間が平行に動く人はまだ救いの余地があるのだけ

れど、年金をはじめとした社会保障に関する思考訓練期間がとっても長いのに思考深度が高まらないひとが、実はたくさんいるようにも見受けられる（笑）。こういう人の論を読んだりしていると、ひとは目で見、耳で聞くのではなく、先入観と偏見で事実を見たり聞いたりするということをしみじみと感ずるのであるが、感心してる場合ではないでしょうね（笑）。

北大の法学研究科・公共政策大学院には、倉田聡先生のおかげで「私も“かわら版（ホームページ）”の愛読者です」と称される方をはじめ、わたくしの文章を読みこなされている方が多くいらっしゃり、とてもスムーズに、わたくしが言いたかったことを理解していただけたと思う。しみじみと思うことは、大切なことは、成人になればある程度固まっている価値観のような気がします。価値観さえ共有できのであれば、職業を問わず、年齢を問わずですね。そして価値観に与える教育の影響はおそろしく大きい。みなさんが今後とも、北大で良い教育を受け続けられることを願ってやみません。

翌日、経済学研究科の旧知の先生にもあって、北大の雰囲気をとっても気に入ったので「経済学研究科、法学研究科、公共政策大学院共同の社会保障セミナーのために、僕は毎年この季節にやってきていいですよ（笑）」とっていました。もし次に行く機会があれば、生協で「ジンパセット」を手に入れてキャンパスでジンギスカンパーティーを、是非、やりましょう。

非常に分かり合える人たちとの楽しい一時、ありがとうございました。

追伸

大学の留守電に録音された電話がどんどんと携帯に転送されてきています。

すみません、いま、海外にいますので、来週末くらいまで連絡取れません。

ごめんなさい。＞ 連絡してくださっている方々

旅先で、こんなものを書くなって(@_@)?